

第4回 和本の楽しみ方2 絵巻物

はしごち 橋口 こうのすけ 侯之介



平安時代には、日本独特の書物が考案された。絵巻は、その美しさ、壮大な仕掛けにおいて他国に見られない魅力にあふれた書物である。とくにこの時間の流れが物語の進行と重なる書物の見せ方は、世界的に見てもユニークである。

絵巻物とは

『源氏物語』に「絵合」という巻があり、左右にわかれて自慢の絵巻を競う会が催された様子がえがかれている。平安時代から言葉（詞章）と絵画によって構成された書物ができていたのである。巻子本（巻物）で作られており、横に長い絵が描かれた。当時はそれを「絵」といった。ストーリーがあって、それに絵を加えたいわば絵物語である。

日本独特の絵巻物文芸

『源氏物語』の例のように物語は冊子に仕立てたが、絵入りの物語は巻子にした。絵と詞書を組み合わせた手法は、一葉ごとにめくっていく冊子形式より継紙にして巻いていくほうがずっと向いていたからだ。この絵が入ることの意義は大変大きい。この場合の絵は、必ずしも説明的ではなく、イメージを膨らませることが目的で、場合によっては作者の意図と関係のないところで絵が用いられていたりする。

絵巻の時空表現

絵巻を見るのは部屋に座って床ないしは低い机に巻物を置き、人の肩幅くらい(50~60cm程度)ずつ左側をスクロールしながら見ていく。右側も巻いて送り込みながら収めておく。最後に見終わったら、この逆にして戻していく。それは絵巻が時間と空間が右から左へ流れるように描かれているからである。時間の流れを追いかながら、同時に空間の広がりも見せる特徴を持っているのだ。座ってこのように巻物をくくると斜め上の角度から見ることになる。絵はそれを計算に入れて、斜め上空から下をながめた俯瞰描写になっているものが多い。



巻物の大きさは基本的に十二世紀頃から近世までのほとんどが30cmから40cmくらいで、床に置いて座って見たとき人に間の視覚にちょうどよい寸法である。絵巻のよさはこれにとらわれずに左右をもっと長く絵を描くことも自由だ。大きなものを人が追いかける、大勢の人が群がっているさまなどは、横に広がると躍動感や迫力が出る。群衆が驚くさまをカメラが移動しながら追っていく映画的手法と同じである。

このように巻子、とくに絵巻の妙味は、自分で開きながら流れるように見ていくところにある。しかも、速度を加減しながら、じっくり見たいところはゆっくり、すぐ次に進みたいときは早回しにしてよい。



12世紀に成立したとされ、奈良県信貴山朝護孫子寺(しぎさん・ちょうごそんじ)に伝わった『信貴山縁起絵巻』から。空を飛んで都へ向かう護法童子を上空から描く。時間方向が逆になっていることでその異能力ぶりを見せていく。強敵や恐ろしいものがやってくるときは左の方から迫ってくる。追いかけられるときは右から狙われる。絵巻は、その美しさ、壮大な仕掛けにおいて他国に見られない魅力にあふれた書物である。とくにこの時間の流れが物語の進行と重なる書物の見せ方は、世界的に見てもユニークである。有名な宋代の『清明上河図(せいめいじょうかず)』は都市の景観を余すところなく描いて壯觀だが、空間軸が中心で時間軸がないので物語的展開がない。ヨーロッパの教会絵は物語性があるが、スクロールではない



異時同図法

さらに一枚の長い絵に同じ人物が二度以上出てくることが許されており、動きや時間の流れを表現する。これを「異時同図法」といって、日本の絵巻が発明した手法といってよい。平安時代の末にできた『伴大納言絵巻』(出光美術館蔵)↑では、けんかをしている子供を見た親がかけつけ、相手の子を蹴飛ばす。一方の子は母親が連れて帰る、という一連の動きを一枚の絵で表現している。子供のけんかに親が出るのは、顰蹙をかったのだが……。広げながら時間軸を追うことで空間が繰り広げるさまざまな事態が体験できる仕組みになる。これが、日本のアニメーションの発達に大きく寄与したところ。

漫画の起源・画中詞

しだいに工夫がこらされて絵の中に文字を入れて解説したり、人物のせりふをいれる「画中詞」という技法も出てくる。

鎌倉時代の絵巻には、現代のコミックの吹き出しに相当する人物の発した声が書き込まれている。画中詞(がちゅうし)という。『天狗草子絵巻』は僧侶の傲慢を天狗にたとえて風刺した話だが、早くも画中詞が用いられている(右上、天狗姿の僧が「われら天くに…」)といっている

これは江戸時代にさらに発展し、近代の漫画へ続く。



絵巻の伝来

平安時代に優れた作品ができた絵巻物は、以後の時代においても多数つくられてきた。室町時代には、多くの物語が創作されたり、江戸時代になると、物語ばかりでなく、あらゆるジャンルで、絵巻にするのがふさわしい作品は、そう仕立てられた。

これが書物とみなされなくなってしまうのは明治以降である。

書物の身体性

書物と接する人は「くくる」、「めくる」、「音読する」などただ目で追うだけでなく、五感を動員するという身体性をもっている。身体全体を使って「読む」のである。絵巻は詞書がリズミカルに音読され、それが今日の映像作品のナレーションの役を果たす。

絵巻の中の時空と、読書の時空とが鑑賞する人の身体によって一体化されていく。それが時間とともにゆっくり流れしていく。絵巻の身体性は大きい。

絵巻でなくとも、本の厚さや形、どこまで呼んだかなど、本には隠された身体性が今でもある。

書物を「読む」一辺倒でとらえてしまうと、このような使い方が見過ごされてしまう。

EBookでも、頁をめくるなどの機能はあるが、そうした身体性をますますなくしてしまう。

本当に次世代の書物をつくるなら、こうした書物の歴史的積み重ねや身体性を生かすことを考えるべきである。とりあえず、EPUB3.01で巻物のスクロール機能を取り入れる方向になつたが……？

紙に印刷された媒体がデジタル化するという形態上の変化だけでEBookを語ってはいけない。

講義の要旨はpdfにするので、各自がダウンロードすること。

http://www.book-seishindo.jp/seikei_tanq/

質問は、専用メールでいつでも。 khashi@s.email.ne.jp

参考文献

『和本入門一千年生きる書物の世界』2005、橋口侯之介、平凡社ライブラリー、1470円

『江戸の本屋と本づくり一続和本入門』2007、橋口侯之介、平凡社ライブラリー、1470円

『和本への招待』2011、橋口侯之介、角川選書、1,680円